

佛教社会福祉事業における
児童指導上の課題について

須賀賢道

はじめに

「私たちの多くにとって、人類の道徳性の現状はきわめて嘆かわしいものと思われるし、それはいつそう悪化し続けている。世界は暴力と不正、不平等、そして人間に対する人間の非人間的行動で爆発せんばかりであるように思われる。」

生活の質を高めていくためには、まず個人の行動を変えることから始めなくてはならない。特に他の人々についての関心を高め、努力とエネルギーを捧げる意欲を他の人々の福祉や幸福を高める仕事と結びつけ、人類のすべてが基本的な尊厳と自由、権利と機会とを享受することを保証するようにしなくてはならない。^(u)

「他の人々の福祉や幸福のための行動」この課題を考えることは、現代に生きる人々が、未来に向ってどのような社会をきざいていこうとするのかにつながる課題であると同時に、今日の社会にあつては、それは非人間化への「抵抗」としての位置づけが必要であるともいえる。

それは、そうした行動が「望ましいから」とか「善行であるから」とかいった問題のものではなく、人間の尊厳と自由、福祉と幸福を確かなものにするためには、現代社会の非人間化への大きな波のうねりに、どう立ち向い挑戦していくのかという課題認識からの出発が必要な重大な問題だと考えるからである。

そうした中であつて、今日、佛教は児童指導のうえで各種の幅ひろい分野にわたつて、佛教精神を基本とした事業を行なっているが、こうした課題に応えられる具体的かつ有効な指導内容と方法をもっているかを、それぞれの分野で改めて問わなければならないのではないか。

もちろん、こうした問題については、すでに早くから各方面において、多くの実践が行なわれてきたものであり、

今日の佛教関係の各種教化事業、また学校教育、福祉事業、その他諸事業の中で、すぐれた成果をあげてきておられることの認識を欠くものではないが、とくに今回は、そうしたものを、情操・心という形で考えられる抽象的な問題ではなく、社会における対人行動というきわめて具体的、顕在的な問題としてとらえて考えると同時に、そうした行動を習得（人間形成）するうえで、佛教社会福祉事業（児童福祉施設・保育所）の果たすべき役割をとくに考えてみたい。

佛教における指導目標

「他人の福祉や幸福のための行動」というものをみてみると、佛教では、それは、大きくは「慈悲」「利他」に代表される佛教精神の具現化ということになるのであろう。

いま、それらを児童に対する実践目標として平易な言葉で表現するとすれば、
やさしい心

思いやりのある心

あたたかい心 をもって行動する人間といえるのではないか。

幼児指導面におけるものとして、佛教保育綱領にみると、

（佛） 慈心不殺 生命尊重の保育を行なおう。（明）

（法） 佛道成就 正しきを見て絶えず進む保育を行なおう。（正）

（僧） 正業精進 よき社会人をつくる保育を行なおう。（和）

以上が佛教徒の基本的な生活態度であり、行動の基準であり、これに基いて保育を行なうとされており、その中の⁽²⁾

「よき社会人をつくる」として、一つの目標がかかげられているが、さらにそうしたものは、世の中のために努める願いを込めた四つの教え「四摂法」が実践的なものとしてあげられている。⁽³⁾

それは、

布施・与えよう ものでも心でも

愛語・語りかけよう 美しいことばで

利行・尽そう 心を込めて

同時・してあげよう 相手の身になって、

の四つであり、いずれも「他のもののために」利他的行動が実践目標とされている。

また、青少年指導面では、全国青少年教化協議会における「若い人を育てる運動」の実践目標がある。⁽⁴⁾

それは、「わたしたちのねがい」として、

底ぬけに人を信ずる人間

よろこんで与える人間

いのちを大切にする人間

考え深い人間

使命に生きる人間

規律あるしあわせをよるこぶ人間

——わたしは、そういう人間になりたい——

であり、それが青少年指導のうえでの佛教の人間像として示され、「よろこんで与える人間」「使命に生きる人間」

という願いの中に、他者への行動が目標としてあげられている。

しかし、ここで重要なことは、徳目的に、また実践目標として、内容が豊かでよく成文化されているということを取りあげるのではない。問題は、そうした目標が、どのように実践されるものになっているかということである。その内容や意味が説かれ教えられて、子どもたちが、そうしたものを知っているということだけでなく、それが行動と結びつくものとなっていなければ、本当の人格形成への寄与とは考えられないからである。つまり、そういうものは、目に見えないものとして存在するのではなく、具現化したものとして、行動としてこそ、その存在価値があるのだという認識が必要である。

老人や障害者のための優先座席はもちろんのこと、一般席にしても、その座を占めながら、そうした人たちに席をゆずろうとしない人がいたとすれば、それは、そうした行動の大切なことを、その人が知らないからではなく、「行動しない」という簡単な事実があるだけである。今日、問われるのは、まさに、この行動化の課題なのである。

佛教精神に基く人間形成は、この行動する人間をつくることになければならない。それは、不正や不平等、殺人、暴力、無関心に満ちていこうとする社会にあって、そうしたものをなくすために、他者のために行動する人間を生み出すことができるかどうかに、われわれの未来がかかっているからである。

福祉社会への構図の中で

今日、福祉社会、あるいはまた、地域福祉がいわれる基盤に、その社会に生活する住民の意識や態度、そして具体的な生活場面での行動が問題とされる。

そのことは、地域福祉に代表的な姿をみることができる。地域住民を、その協力者とみるか、あるいは自発的行為者とみるかにちがいがあっても、いずれにしても、その地域に生活する住民の意識と行動が問われることになる点では変えることはないであろう。

地域福祉、福祉社会・国家としていわれている内容を、一概にいうことはできないとしても、共通していえることは、社会福祉というものは、単に国家・政府・行政だけのものとして考えるのではなく、住民自身が、その地域における住民相互の問題としてとらえ、みずからも行動することが不可欠であるという認識であろう。

このことは、一つの側面として、社会福祉サービスが、在宅福祉サービスを中心として多様な領域のサービスが求められるようになったことにもよるが、市民福祉ともいふべき、その社会全体を福祉の視点から再構築していこうとするために、公的責任をどうみるかの問題はあるとしても、今日、一定の課題として問われるようになってきたことによるものでもある。

このことは、ノーマリゼーションの原理を、今日における社会福祉の重要な課題としてうけとめることから、さらに明確なものとなる。

「すべての精神遅滞児・者の日常生活の様式や条件を、社会の普通の (regular) 環境や生活方法に、できるだけ近づけることを意味する」⁽⁵⁾ というノーマリゼーションは、その具体的な内容として、家庭で生活しながら通学・通勤ができ、余暇も含めて地域社会のひとたちとの交流がもてる生活。ライフサイクルを通じて、ノーマルな発達のための経験をする機会をもつこと、男女両性のある世界で暮すこと。他の住民と同じ、ノーマルな経済的水準・環境水準が保証されること等があげられている。⁽⁶⁾

障害のある人もない人も、共に同じ生活様式、生活水準で生活しあえる社会、そうした生活を日常のものとするの

には、その社会に生活する住民の意識、態度、行動が当然問題となる。

従って、そのためには、北欧では「市民の社会的意識の変革、あるいは新しい価値観の創出が必要であった。」⁽⁷⁾とされるのは当然のことであろう。しかし、ここで最も大切なことは、ノーマリゼーションの原理が単に理論として論じられるのではなく、つねに具体的な方法・手段をもって、その原理を実現するように努力されてきたという点である。⁽⁸⁾つまり、そうした努力が、意識の変革や新しい価値観を創造する役割を果たしたともいえる点である。

社会福祉の新たな姿として、地域福祉・コミュニティ・居宅保護・施設の社会化・脱施設化等といういろいろな形でとりあげられたとしても、それを支えるのは、その社会の成員の具体的な行動である。そうした行動する成員形成の可能性を、われわれは、われわれの未来のためにさぐらなければならない。

向社会的行動

「向社会的行為 (prosocial behavior) とは、外的な報酬を期待することなしに、他人や他の人々の集団を助けようとしたり、こうした人々のためになることをしようとする行為のことである。

このような行為をする場合には、行為をする側のある者にあるコスト (損失) や自己犠牲、危険といったものが伴うことが多い。この行為の中には、実に広い範囲のいろいろな行動が含まれている。寛容さ、利他心、同情、悩みをもっている人々に物質的・心理的な援助を与えること、自分の持ち物を分け合うこと、慈善団体への寄付、不正や不平等・野蠻さを少なくすることで福祉を高めようとする活動への参加などは、向社会的行動の例である。」⁽⁹⁾といわれる。

いま、そうした行動に対する考え方には、社会福祉事業におけるボランティア活動も含めて、その視点、方向性等に論議はあるとしても、これからの社会づくりのうえで重要な要件であることにちがいはない。

そのため、いま問題とされることは、そうした向社会的行動を生む動機や要因である。つまり、そのような行動はどのようにして生まれるか、また、そうした行動をする人格はどのようにして形成されるのかという問題である。それについては、内面化された動機や自己報酬（自尊心や満足感、喜び、プライドが向社会的行動によって高められる場合のような内在的報酬^(a)）が多くのそうした行動を決定しているといわれているが、そうした行動を生むパーソナリティの形成、また、具体的な行動を生む要因は、単一なものとは考えられない。成長過程における学習や経験などいろいろなものが複合しているものと考えられ、それには、次のようなものがあげられている。

- 1 生物学的要因
- 2 集団所属性と文化的要因
- 3 社会化経験要因
- 4 認知的機能要因
- 5 状況・環境的要因 等である。^(a)

一 生物学的要因

利他的行動についての遺伝子との関係であるが、動物の利他的行動、とくに自己犠牲的な行為の研究から、人間の向社会的行動の基礎に生物学的要因があると考え、そのかわりをみようとするものである。

二 集団所属性と文化的要因

人々の行為や動機、志向、価値といったものが、その人の育てられた、また所属している集団、文化等によって、かなりの程度左右されるということから、その要因としての役割をみようとするものである。

三 社会化経験要因

前項の要因と深いつながりがあるが、これは子どもが社会化していく過程での経験が大きな役割をもつものと考えられるもので、これには、両親をはじめ、家族、友だち、教師、また、マスメディアなどとの広い関係が考えられるものである。

四 認知的機能要因

向社会的行動をとる場合、その場の状況を正しく知覚し解釈すること、相手の感情や欲求をよく理解することなどが、自分のとるべき態度、行動の決定などを生みだす基になるものであり、そうした面からの要因を考えようとするものである。

五 状況的・環境的要因

これには、偶然出合った出来事という状況的なものから、その時の感情や、その場の雰囲気、また、その行動の対象者など、いろいろな要因があり、その中には、宗教におけるお説教といったものも含まれており、そうしたものとのかかわりから行動の要因をみようとするものである。

このように5つの規定要因が考えられているが、その中でも、社会化経験が、子どもの成長発達そのものと結びついているものであるといわれていることから、一般的にみて、いちばん重要な規定要因ではないかとみられている。

向社会的行動と児童福祉施設

向社会的行動の習得と児童福祉施設の関係を考えるのは、それが福祉の行為であるからではない。本来そうした行

勤の習得は、限られた場というものではないとしても、一般的には家庭を中心として、いまみてきたような、いろいろな場と要因によって習得されるものである。しかし、児童福祉事業の対象児として、児童福祉施設に入所している児童にとっては、通所施設である保育所の場合を考えてみても、児童福祉施設の場合は、そうした規定要因の非常に多くのものをもっている場であるというところに、この関係の重要な位置づけがある。

たとえば、社会化経験の場合、それは両親や友人、仲間、教師、マスメディアなどが、その重要なエイジェントだとされていたが、子どもの生活時間から考えても、保育の場は、その生活時間の中でも重要な昼間の活動時間のほとんどを占める場であり、その時間全体を通じて、保育者が親と教師の二者の役割を担うこと、子どもの仲間がいること、マスメディアについても一定の調整を行なうことのできる場であることなどを考えれば、その社会化経験に占める役割の非常に大きいことが理解できる。

個人に対して重要な評価を与え、自己像の形成と維持に影響を与えるような他者が「意味ある他者」といわれる。⁶⁴⁾ 母親は、無力な幼児や十分に自立していない子どもにとって最大の依存対象であるとともに欲求を満たしてくれる源泉であり、活動への動機づけを与えてくれる存在という点から、最も重要な意味ある他者である。保育者は、その母親のすべてに替る存在ではないとしても、昼間その大切な部分を担う存在であるとともに、保育の場では、子ども全体に対して教師としての意味ある他者の立場もとる存在と考えれば、保育の場と保育者の重要性が認識されるところである。

また、そのほか認知能力、共感性の発達、雰囲気、種々な機会をつくれることなどを考えれば、向社会的行動を育む場としての児童福祉施設の役割は、さらに大きいものといえる。

保育の場の役割

保 育 者

保育者の保育態度については、一般に愛情を基本として専門的な知識と技術に基く保育ということがあげられるが、向社会的行動の習得においても、まず、このことが基本である。

向社会的行動の研究の中では、そうした保育者の望ましい態度については、養育的または養育性という言葉で表現される。⁽⁶³⁾

養育的（性）とは、援助を与えて、親切で、愛情深く、激励的な養育、愛情のある世話の仕方であり、そうした養育性というものが子どもの向社会的行動を育てる基本であるといわれる点では、一般的にいわれるものと変るところはない。しかし、ここで重要なことは、そうした、子どもたちを温かく支持し愛情をもって扱うだけでは、親切で思いやりのある子どもを育てることはできないとされる点である。⁽⁶⁴⁾

すなわち、養育性とモデリングとが結びついたとき、それも、その行動が、はっきりと表に出ているモデルの行動に接触するとき、子どもの向社会的行動を形成することが予想されるし、実験でもその効果を認められているという点である。⁽⁶⁵⁾

この養育性とモデルの向社会的行動との結びつきについては、「しつけ」の面からも研究されている。それは、とくに女子の場合の結果ではあるが、力中心で身体的な罰を加えたり、物や権利を奪ったり、脅したりするやり方をした場合、「思いやり」の水準が低く、「誘導」すなわち、子どもに正しいかまちがいかをきちんと指摘して説明したり、よその子の気持ちに関心を向けさせるようなやり方をした場合、仲間の間で思いやりがあると評価されることと

プラスの関係にあったと報告されている。⁽⁶⁾

このことは、単に保育者の態度の問題としてみるのではなく、例えば、物理的な力や脅迫的な態度をとる保育者の行動がモデル行動となり、そうした攻撃的行動で、目的を達成することを子どもに教えることになることに注意しなければならぬ。⁽⁶⁾

また、よその子の気持に関心を向けさせるということは、共感性との結びつきで非常に重要である。

共感とは「ある人が感情（情動）状態を体験し、それが表出されているとき、それにさらされた他の人が同じような感情状態を体験し、表出することになること」⁽⁶⁾であり、この共感性を向社会的行動の前提条件であるとする考えは多いようである。⁽⁶⁾

そしてこの共感性も、両親がしつけの技法として誘導的なやり方をし、他人の感情や情動に注意を向けさせる場合は、その発達は早まるであろうし、反対に、規則をきちんと守らせることに固執して相手の感情を無視するようなやり方をした場合には、その発達は妨げられることになるといわれる。⁽⁶⁾

いまみてきたように、養育態度、すなわち保育者のあり方は、保育者が、第一には、親切で、愛情深く、援助的、激励的態度であることが基本であり、第二には、子どもの行動について、正しいかまちがいかをきちんと指摘して説明し、他の人の感情への注意を含めて誘導できること。そして第三は、常にそうした前二点のモデルとして行動できるという保育者像が想定される。とくに、第三点の行動のモデルとしての保育者の存在という視点が重要なものとして、新たに浮びあがってくることになる。

「何だかちょっとしおれているみたい」と葉をめくり、「土がガサガサだ。ほっておくと枯れちゃうよ。あたし水やっておいてあげようか」という鉢植えの花をみての行動の中には、花がしおれているという状況を知ること、水が不足しているという判断、枯れてしまうという推測、水をやるうという意志決定、さらに水を運ぶ方法、やる水の量の決定など多くの事を知って、考えて決定する要素が含まれている。

これは、対人行動の場合には、相手の感情の理解や欲求への評価、効果的、有益の行動の選択など、もっと複雑なものが考えられる。そうした認知等の基礎に、一般的知能、道徳的判断、役割取得と共感性の三種類のものがあがれるが、知能テストの判定値の高いことや、道徳的徳目や社会的規範を知っていることと向社会的行動とは高い相関関係を示さないといわれている。²⁴⁾

そのことは、保育者が保育の場において、前項でもみてきたように、社会的に望ましい行動を口頭で教え、知らずことではできても、その積み重ねが、そうした行動を導き出すことと結びつくことは予想外にすくないといえることと同じであろう。

それはまた、他の面からいえば「他人を助けることについて社会的規範に同調して行動することに失敗するのは、多くの場合、ある状況の中で、どうやって相手を助けたらよいのかをまったく知らないためである。」²⁵⁾という言葉に代表されるように、規範を知っているあるいは、思う心があるというだけでは向社会的行動とはなりにくい、別な要素のあることが考えられる。

このことは、障害者との生活の中で結論的にいえる。つまり、障害者への援助が必要なこと、大切なことは知っているても、どんな時にどんな援助が必要なのかがわからず、行動化されないまま過ごされる場面も多いのではないかと考えられる点である。

その中で、共感性と役割取得が向社会的行動と結びつく大きな要因であるといわれるのは、その事と対比して大きい意義をもつ。それは、共感性の水準は、向社会的に行動する傾向を左右する有力な要因であることによるが、その重要な点は、「共感性の能力は、かなりの程度、訓練や経験によって高めることができる。」という点にある。

このことは、さきにふれた障害児との生活の問題、ひいてはノーマリゼーションを可能とする課題の一つとしても非常に大切な点とみななければならない。統合保育を通じていわれる障害児の発達もさることながら、他の障害をもたない子どもが、障害児とふれ合い、精神面、行動面で仲間として一緒に生活しあえる姿へ発達するのも、この経験の大切さを証明するものであろう。障害児への理解を説くことは大切であるが、同じ保育の場を通じて育つ、行動で学ぶことの大切な意味がそこにある。

状況・雰囲気

特別な出来事や、思わぬ出会い、その場の雰囲気などによって、人間の行動は影響を受けるものであり、向社会的行動についても、そのことは同じである。

これには、いまあげた、出来事、出会い、雰囲気などとともに、他人から受けた行為、（暖かい行為もあれば、冷たい行為もある）さらには、向社会的行動の対象者によっても影響されるものである。

保育の場の作用の大きさは、最初にあげたが、また、その逆の考え方もあるであろう。やはり親の存在は大きいし、地域社会の人たちやマスコミの影響は大きいと。しかし、いまここで考える状況的規定要因は、そうした、ふれるものとの時間の長さや、種類の多さ、また、権力的な力の強さを無視するものではないが、保育者の子どもに与える影響は、それにもまして大きいと考えられる点である。保育者の態度・行動等にふれる時間が、たとえ短かったと

しても、その子どもの将来の性格や行動傾向などに大きな影響を与えてしまう力をもっていることを否定できるものではないし、また、そうした力をもつことが望まれるところである。すでにふれた「意味ある他者」としての重要性である。

とくに、特別なプログラムを計画・実施することによる、場面の変化や、刺激の変化は、大きな作用となることを考えなければならぬし、また、よい雰囲気は、向社会的行動を引き出すし、否定的雰囲気は、その傾向を妨げるはたらきをするといわれる点も重要な点である。自分が幸福であったり、快適であったり、成功していると感じている子どもの場合は、悲しい出来事を想い出したり、失敗したと感じたりしている子どもより、より多くの向社会的行動へ導けるのではないかと考えられている。

その事をもって、直ちに子どもの雰囲気のそうした意味での改善が向社会的行動を生む要因とすることは早計としても、明るい、楽しい雰囲気が、保育者や保育の場に大切であることの証明の一つであろう。

家庭や学校、また教会などのお説教の効果も状況的規定要因のなかで論じられている。それは、いくら慈善についてお説教をしても、その当事者が、実際に欲深い行動をすれば子どもはそれに従うし、またモデルが慈悲深い行動をすれば、たとえ欲張ったことを口にしても、子どもはその行動に従うというものである。

しかし、他のお説教の例からは、「おだやかで内容の少ないお説教は子どもの向社会的行動に変化を与えることは少ないが、もっと直接的で内容があり、そして向社会的行為が強く取り上げられているお説教の場合には、それは効果的なものとはなり得る。」といわれていることから、子どもへのそうした面からの働きかけは、やはり身近な具体的、直接的内容のあるものをとりあげて話すことが必要である。このことは、とくに、佛教者による保育・養育の場面で考えなければならない点であろう。

社会化の側面から

いままで向社会的行動という面から考えてきたが、その要因の中に占める社会化経験の重要性、また、子どもの発達は社会化だともいわれることから、この問題を社会化の側面からもみてみたい。

社会化とは「個人が当該集団の容認する社会的行動を習得することによって、集団への適応を学習する過程である。」⁶⁴⁾といわれるが、この社会化の中で重要な問題は、子どもが社会からの要求に見合って社会化されていくという、社会本位の社会化⁶⁴⁾ではなく、自己の要求に即して自分自身をつくっていく自己社会化、または個人本位の社会化⁶⁵⁾といえる面の重要性である。

つまり、人間のパーソナリティは、環境にたいする適応組織ではあるが、単に受け身的に「あたえられるもの」として受けとめていくのではなく、社会化の圧力を個性的にうけとめていく自己適応的システムをもつ点である。⁶⁶⁾それはたえず自己を「創造的に生成 creative becoming」し、自己実現していくものであり、⁶⁷⁾また、そうした自己形成の能力は、社会化要求を自己流の社会化へと転化させる変換能力であるといわれる点である。⁶⁸⁾

そうした子どもの社会化・発達の能動的な姿からみれば、向社会的行動も、保育者や親などから一方的に学習させられ形成されていくものではなく、子どものそうした積極面、自己形成能力と結びついてこそ自分のものとして内在化することになるのである。

しかし、そうした自己形成作用は、いつも積極的に十の方向を目指して作用していくものとは限らない。

「子どもの能動的個性的選択活動が課題解決に際して、常に価値実現の方向を生み出すとは限らない。むしろ子どもを課題場から逃避させたり、対人関係において利己的解決に走らせたりするような方向への変化をひきおこす契

機も、発達的变化をひきおこす契機と同等あるいはそれ以上に存在している。」⁽⁸⁹⁾ という問題の存在である。従って、そのため、常に価値実現の方向、向社会的行動におけるコストの損失をいとわず行動できる自律的人格形成にどう働きかけていくかが課題となる。

こうした働きについては、すでに向社会的行動の規定要因の中で保育者の態度等でみてきたところであるが、この自己形成との関係からも、さらに考えてみたい。

一般に自律的性格をうみだす社会的条件はどのようなものであるかとして、

① 社会において行動の選択の自由が許容されていること。

② 行動の選択の基準がなにに由来しているかが明確であること。の二つがあげられる。⁽⁹⁰⁾

また、さらに、そうしたものの具体的な形態のものとして認められるものに、「愛情」と「規律」があげられる。それは、「青少年が健全な人格として成長するかどうかは、かれらが、〈愛情〉と〈規律〉にどれだけ恵まれているかによる。」とするものである。⁽⁹¹⁾

そこにいる愛情とは、

① 人間的な純粋な、誠実な態度。② 共感的理解。③ 受容、無条件的積極的尊重の三つの態度が具体化される

〈愛情〉である。

規律とは、内在化された集団規範、構成員が内発的にしたがっている内在化された集団規範である。そしてそれは、「愛情的・共感的・許容的雰囲気の中で自発した学習意欲が、学習すべき範例、学習内容をあたえられなければ、それは、いたずらに空転、浪費される」からであり、学習対象としての範例があることによって自発した学習意欲は実体化されるとする。⁽⁹²⁾

それは、愛情体験——信頼——情緒的安定感——生活の喜び——生活意欲——学習意欲——自発的・主体的学習活動⁽⁴⁸⁾というルートの先に、学習対象（範例）を考えるということである。

このことは、さきに向社会的行動の問題の中ですでにみてきたものと共通する考え方である。つまり、向社会的行動を育てるうえで保育者の態度が養育的であること、正しいかまちがいかの指摘と誘導、モデル的行動という三つの要素と、自律化のための、行動の選択の自由と選択基準の明確化、さらに、健全な育成のための愛情と規律（範例）という三者の間には、共通した人格形成への働きかけの基本をみることができる。従って、このことから子どもの保育の場を点検し構築していくことが必要である。

保育の場・再構築の視点

いま、保育の場をそうした視点からみると、子どもの成長のために、子どもが、おとなに管理されことなく、自分の好きなことをしてあそべる空間として「自由空間」の必要性に目を向けなければならない。

松田道雄は「自由空間は、いってみれば子どもが自分自身で主人であることのできる場です。そこで精神がそだつのも精神はもともと主人であるときにしか、思うように羽ばたけないからです。」⁽⁴⁹⁾とのべるとともに、いま一つの大切な意味として、そのクッション作用をあげている。つまり、親や先生から、きびしいしつけを受けても、また、ひどく叱かれても、それを子どもたちが受けとめられたのは、いったん外へ出てしまえば、友だちとすきなことをして遊びに夢中になり、しかられたことを忘れてしまえる自由空間というクッションがあったからだという。

親もまた、子どもをひどくしかったとしても、子どもが自由空間で遊んでいる間に自分の腹の虫も自然におさまるという親にとっても、クッションといえる役目を果たしていたといえるものがあつたのです。

現在の子どもには、(親にも)そうした「自由空間」といえるものではなく、従って、そのため子ども仲間との遊びももっていないというのがほとんどの現状であることから、いま、われわれが考えなければならぬ課題は、そうした自由空間が子ども達の生活の中で、大きな位置を占めていた時代における保育の場の設定と、そうしたものを失った今日の子どもに対する保育の場の設定の相違である。

とくにそれは、そうした空間を今日の社会の中のどこに見出すのかという、一般的社会問題としてではなく、児童福祉事業における保育・養護の場は、子どもの生活時間の大半を占める場であれば、そうした自由空間ともいえる場を保育の場につくり出す配慮が不可欠であるという問題である。

しかし、今日、保育の場は、物理的に狭小であるという条件に加えて、その保育内容・教育内容の重要性が強調されてきて、「保育所や幼稚園でやる『おあそび』は教師によって一定の目的にそって計画されている。毎月何種類もの保育の雑誌に、目的と指導法が懇切にかきこまれた『あそびのカリキュラム』は、せまい空間で、どうすれば多数の子どもを、けがしないように、おもしろがらせ、しかも何らかの能力をたかめられるかをかんがえぬかれた計画である。」⁽⁴⁶⁾という批判をうんでいる。それは、自由な空間を十分にもった子どもたちに対する指導としては、その意味も大きかったとしても、今日、自由空間をもたない子どもに対しては、逆に保育の場は、そうした自由な空間を確保するための場としての役割を第一に考えなければならぬのではないかという疑問である。自由保育という時間があるからという考えではなく、自由時間をつくるのが保育の場の第一の目的だと考えなければ、本来子ども達の自由な姿をとりもどす場はない、いわば、子ども達の人権を尊重できる場はないのではないかという疑問である。

向社会的行動における弱い子をいたわるという行動も、それは博愛思想を大人から教えられて、小さい子どもをいたわるのではなく、あそびをつづけるためには、そうするほうがいいと思っただけであり、子どもがあそびの主人と

なつたときにうまれてくる行動だという指摘⁽⁴⁷⁾。また、道徳的判断というものも、自分が自分の主人であるときにできるものだという指摘⁽⁴⁸⁾。さらに、自由を通じてこそ自主的な自己形成ができるのだという提起のもつ重要な意味を保育の現場のものとして考えなければならない。

歩行器の弊害がいわれる。「はいはいをしなかったんでは、手、足、背、腹などの神経・筋・骨を充分に使わないことになる。乳幼児の諸器官の発達⁽⁴⁹⁾は、それを適度に使うことによって保証されるとすれば、はいはいの省略は後のためのマイナスを残すことが考えられます。」として、実際に七転び八起きすれば感覚器も運動器も、その役目を果しつつ成熟するものであり、はう→立つ→歩くという発達の道すじの大切なことは、子どもの社会化、人格形成の基礎にも同じことがいえるのではないか。

「けんか」は自律の学校といわれ、「けんか」はただ対人関係の練習や演習ではなく人間としてもっとも大切な、自律の練習だからといわれるのも、そのことに共通する問題をふくんでいるのであろう。

今日、自由な遊びと遊び場をもたないこと、家への閉じこもり、室内の遊び、テレビの一方的情報過多、自然のそつ失、おもちゃの機械化・電子化など、子どもが育つ空間は、極めて望ましくない方向にすすんでいるといえる。

見る、聞く、話す、匂ぐ、味う、触れるといったことも、感じることも、思うことも、また、心がはずむことも、悲しみに泣くことも、子どもが自由に遊ぶ中にこそ、いきいきとした生命のいとなみとしてみられるものなのである。そして、そうした生命の充実感こそが、他者を受け入れられるパーソナリティの基礎をつくることになると思われる。保育の場合は、こうした視点から再構築されることが必要であると考えられる。

児童指導の基本

法然上人の教えに導かれる児童指導上の理念の第一は、その大いなる受容性であろう。法然上人が「われ浄土宗をたつる心は凡夫の報土にむまるゝことをしめさんがためなり」といわれた立教開宗の心である「凡入報土」の心は、まさにすべての児童を、あるがままの姿でわけへだてなく受け入れる受容への偉大なる教えと受けとらねばならない。人間性を矯めて聖者となるものでもなく、戒定恵の三学を修して菩薩道に堪えて得る聖者の宗教でもない。「わが身は戒行をいいて一戒をもたず禪定において一もこれをえず」として、あるがままの人間救済の教えを樹立されたのが法然上人の教えである。

いまそのことから児童指導上の課題を考えれば、今日、それぞれの部門が、それぞれのあり方を追求するなかで、あまりにも自己目的にとらわれることから、子どもをありのまま受け入れ、自由に育てる方向を見失なっているのではないかということである。

もちろん目的とそれにとまなう計画性をもつことの重要性を否定するものではないが、すでにみてきたように、児童の向社会的行動の習得、社会化過程における自己創造活動をみて、それは、外側からの一方的教化作用で生まれるものでないことは明白である。養育性といい、愛情といい、自由空間といい、そうした大きな受容こそが、その出発点である筈である。静かに礼拝し、法話を聞き、誓いを守らせようとする養育の中から期待されるパーソナリティ・向社会的行動人間は生まれてこないとみなければならぬ。そうしたものを支える保育全体の構造がどうあるべきかを考えたうえでなければ、実体のあるものとはならない。法然上人の否定された観法・智恵学問・持戒を今日、児童指導のうえで、なぞらえようとするようなことをしてはならない。

悪人正機とまで徹せられた受容と解放の教えの真意に学び、子どもの本性を現世に甦えらせる場として仏教児童福祉事業の場は確立されなければならない。それはまさしく、子どもの中に仏性を見出すことである。

法然上人の教えに導かれる児童指導上の理念の第二は、口称念仏の教えにつきるその実践性である。法然上人の教えは、まことに明快な実践の行であり、念仏即生活の教えである。われわれは、そこから子どもと一体となつてすむ姿を学ばねばならない。

「善導の釈を拝見するに源空が目には三心も南無阿弥陀仏、五念も南無阿弥陀仏、四修も南無阿弥陀仏なり」として「信より行へ」よりむしろ「行より信へ」とその実践することの大切さを説かれた教えに学ばねばならない。

いま向社会的行動を考えるうえでも、意識の変革がそうした行為を生むともいえるが、行動することが、その心をつくっていくという実践の大切さを教えられたのが法然上人の口称念仏の教えである。ノーマリゼーションにおける新しい価値創造も、具体的な行動を探る中からこそ生まれてきたとみるべきであろう。われわれも、重症心身障害児など多くの障害児の療育の中から、その事を学びとってきた筈である。障害児観が確立して療育が生まれたのではなく、ひたむきな療育の中から、障害児観が導き出され、療育の方法も見出されてきたのである。実行することが児童の指導のうえで重要なポイントであることは、すでにモデリング、範例としてみてきたところである。

とくに今日の社会は、モデルそう失の時代だともいえる。これは子どもにとっては、社会化過程における自己像や役割取得のうえでの混乱である。都市的逸脱がいわれ、価値感の多様化、いろいろな主義主張の交錯する中では、ことに大きい問題である。

こうした中であつては、児童の指導は、保育者、養育者みずからの実践性、行動性にかかっているといえる。生涯

を木綿の黒衣にねずみ色の袈裟をつけ、みずから民衆とともに念仏された法然上人の姿を児童指導における保育者の姿としなければならない。

むすびにかえて

向社会的行動という具体的な問題をとりあげて、佛教者（浄土宗徒）の行なう社会福祉事業における児童指導上の課題を、保育の場を中心としてみてきたが、多くの検討課題を残すだけのものとなった。

とくに指導内容の具体的なものはもちろんのこと、その場の設定されている社会的条件等に関するものについては、まったくふれることはできなかった。

しかし、佛教社会福祉事業が、佛教精神にもとづく処遇と人間形成を中味とする故にこそ、その存在価値があるとするならば、教えがどう行動化されるかは、その中心課題として、より多く実践的に研究され、ひろく共通のものとなることの必要性が痛感される。

今回、この小論の中心としてとりあげた研究書が、わが国のものではないだけに、早計な判断はひかえなければならぬ点が多いと考えられることから、現場で今日実践されているものが、研究・集約され、一つの道すじをつくっていくことがなによりも大切なことと思われる。

そうした期待をふくめて、今後、諸家の実践にいいよ学びたい。

文献（註）

○思いやりの発達心理、P・マッセン、N・アイゼンバーグ著菊地章夫訳、金子書房から (1)二〇三頁、(9)四六頁、(11)四二～四六頁、(13)九〇頁、(14)一〇九頁、(15)一一〇頁、(16)一一〇二頁、(17)一一二頁、(20)一四八頁、(21)二〇二頁、(24)二三三頁、(25)八〇

- 九頁、68一五四頁、67一六三頁、68一八一頁、69一七一頁、69一七一頁、69一七九頁、69一八〇頁
- 佛教保育講座一から (2)「佛教保育綱領のもとに、古屋道雄」日本佛教保育協会編、鈴木出版
- 佛教保育365日から (3)二四〇二五頁「佛教保育のめざすもの、松樹素道」ひかりのくに株式会社
- 「わたしたちのねがい」・全国青少年教化協議会(4)
- 社会福祉学第2212号、「ノーマリゼーションの原理」の起源とその発展について、中園康夫から (5)九六頁、(6)九六〇九七頁、(7)一〇二頁、(8)一〇二一〇三頁
- 現代の青年、柴野昌山著、教育学大全集23から、69九三頁、69九六頁、69九八頁、69一〇〇頁、第一法規
- 共感の心理学春木豊・岩下豊彦編著から、69四頁「共感の研究・春木豊」川島書店
- 変革期の人間形成、麻生誠・柴野昌山編集から、6768一八頁、40二九〇三〇頁「人間形成の分析視点・柴野昌山」アカデミア出版
- 前掲書から41二二九頁、42二二一頁、43二二〇頁「現代社会と青少年指導・木原孝博」
- 子どもの発達と教育3から、69一二三頁「能力の発達と人格の形成・園原太郎・岡木夏木」岩波書店
- 自由を子どもに、松田道雄著から、44一〇〇頁、45五八頁46六七頁、4748六九頁、岩波書店
- 子どもの成長と脳のはたらき、千葉康則・近藤薫樹著から、6263三五頁、49一〇〇一一頁、50三八頁「保育・教育と子どもの世界・近藤薫樹」、有斐閣
- 法然上人行状画圖から 6162第六卷、63第二二卷

